

所沢中央病院だより

2025.12 vol.9

私たちは

生命を慈しむ心を大切にし

地域の皆様から信頼される

医療を提供します

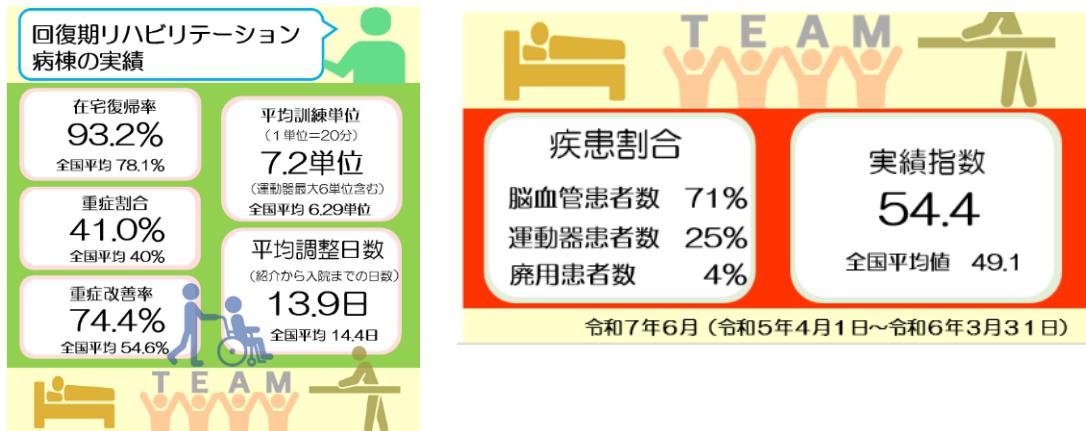
第四回 地域連携交流会の開催

2025年11月12日「第四回 地域連携交流会」を実施し、地域の30余りの医療機関から75名の皆さんにご参加いただきました。活発な意見交換が行われ、地域医療連携の強化につながる有意義な時間となりました。

各科診療医師より、専門分野における取り組みについてご紹介し、会場は終始和やかな雰囲気に包まれました。当院では11月より新たに「救急科」を開設し、これまで掲げてきた“24時間365日断らない救急”の理念を、より確かなものとするため、救急体制を一層強化いたします。新設された救急科では、恩田医師が部長として着任し、呼吸器外科学会認定専門医や日本救急医学会ICLSディレクターなどの経験を活かし重症患者を含むあらゆる救急症例に対し、迅速かつ適切な医療を提供します。

また、院内各診療科との連携体制もこれまで以上に強化し、患者さんがより安全かつ円滑な治療を受けられる体制を構築する熱意をお伝えいたしました。

今年度の重点施策として急性期治療を終えられた患者さんが、安心して地域の医療機関へ移行できるよう「逆紹介チーム」を発足いたしました。医師、看護師、地域連携担当者などの多職種で構成されたチームで、急性期医療の役割を果たした後も、患者さんが途切れのない医療を受けられることを大切にし、地域のかかりつけ医や関連医療機関と密に連携しながら、スムーズで丁寧な逆紹介を行ってまいります。これからも、地域の皆さんと共に支え合う医療体制を築き、患者さんにとってより安心・安全な医療環境を提供していくことを同チーム長である脳神経外科新田部長よりお話しいたしました。



所沢リハビリテーション病院の坪川院長からは、同院で日々取り組んでいる質の高いリハビリテーション提供体制についてご紹介いただきました。

同院では、2名の経験豊かな脳神経外科専門医が常駐し、患者一人ひとりの回復段階に応じて、質・量ともに充実したリハビリテーションを提供しており、その結果として地域でもトップクラスのリハビリテーション単位数を実現しています。また、徹底したチーム医療と早期からの在宅生活を見据えた支援により、在宅復帰率も非常に高い水準を維持しているとの説明がありました。患者さんが安心して自宅へ戻り、その後の生活を前向きに歩めるよう、多職種が連携しながら一体となって支援する同院の取り組みは、地域にとって大きな力となっています。当院の急性期治療を終えられた患者さんが、その後も安心してリハビリを継続できるよう、当院は同病院と電子カルテの連動を含めた連携を行い、最適なリハビリテーションへとスムーズに移行できる体制を整えております。さらに、回復期でのリハビリを終えた後は、地域のかかりつけ医の先生方へとしっかりとおつなぎし、患者さんが住み慣れた地域で継続的な医療を受けられるよう支援していきたいと思います。

今回の会では、診療情報の共有をはじめ、救急医療体制や地域包括ケアを見据えた協力体制など、幅広いテーマで意見交換を行いました。参加者同士の交流も深まり、顔の見える関係づくりにつながる貴重な機会となりました。

さらに各医療機関が抱える課題や取り組みが共有され、実際の診療現場に直結する有意義な意見が多く寄せられました。地域医療をしっかりと支えていくためには、医療機関同士の円滑な連携が欠かせないことを、改めて確認する場ともなりました。日頃より当院の診療および地域医療活動にご協力いただいている皆さんに、心より感謝申し上げます。

今後も、地域の皆さんにより良い医療を提供できるよう、連携強化と情報共有の機会づくりに努めてまいります。



救急科新設のご紹介

救急科部長 恩田 貴人

所沢中央病院 救急科・呼吸器外科の恩田貴人です。入職して9年、当院が地域の皆様に寄り添い、信頼され続ける病院であり続けるよう、日々研鑽を重ねております。今回は、私のライフワークについてご紹介いたします。



伝統を受け継ぎ、未来を拓く—— 選ばれる救急へ



2025年11月より救急科・診療部長を拝命いたしました。当院の救急医療は、北秀幸名誉院長が礎を築き、宮崎寛院長がその理念を継承し、地域から厚い信頼を頂いてまいりました。この伝統を守り、より実効性のある形へ発展させることが私の使命であると考えています。

救急外来は医療の最前線であり、同時に“地域の希望”でもあります。だからこそ救急科は病院の中核を担う部門として、常に進化していかなければなりません。そのために応需率の向上、診療までの時間短縮など、具体的な改革を進めてまいります。とはいって、これらは私一人の努力で成し遂げられるものではありません。各診療科医師、看護師、放射線技師、検査技師、医療相談員、事務スタッフなど、多職種の支えがあって初めて実現できます。さらには近隣の病院、クリニックの皆様との連携も不可欠です。救急隊との協力体制の強化も、地域全体の救急医療を支える重要な要素です。搬送現場でのコミュニケーション改善、病院到着後の迅速対応、情報伝達の精度向上に取り組み、より安全で円滑な受け入れ体制を構築していきます。

人材育成も欠かせません。医師・看護師とともに、初療の動き方、重症度判断、急変対応など、救急医療の基本を共通言語として共有できるよう、勉強会やシミュレーション教育を積極的に導入していきます。「この救急科で学びたい」「ここで働きたい」と思ってもらえる環境づくりを大切にしています。

救急医療の中心にあるのは、病気ではなく“人”です。どれほど医療技術が進歩しても、患者さんやご家族の不安に寄り添う姿勢は決して忘れてはなりません。病気だけを見るのではなく、患者背景や生活、人生に目を向けた医療を実践していきます。

地域に選ばれる救急科へ。そして、職員が誇りを持てる救急科であり続けるために、不断の努力を重ねてまいりますことを、ここにお約束いたします。

質の高い呼吸管理を院内に—— RST の取り組み



呼吸サポートチーム (RST: Respiratory Support Team) は、院内の呼吸管理の質向上を目的に 2017 年に結成された多職種チームです。呼吸管理は患者さんの生命に直結する領域であり、RST は“横断的に支える呼吸の専門集団”として活動しています。メンバーは単なるスタッフではなく、同じ目的に向かって進む同志＝クルーです。名札には“now or never(やるなら今しかない)”と刻んだバッジを着用し、迷わず行動する覚悟を共有しています。



抜管に継続的に介入し、「困ったときに相談できるチーム」として院内から高い信頼を得ています。また、クルーがテーマを決めて開催する勉強会を通じて、実践的な知識を互いに学ぶ文化が育っています。私も呼吸器外科医として、病態理解や人工呼吸の戦略など専門的視点から教育に関わり、チーム全体のレベルアップを図っています。

RST は、理念と情熱を共有するクルーが集まり、患者さんの「呼吸する力」を支えることを使命として活動しています。“now or never”的精神のもと、今後も質の高い呼吸管理を院内に根付かせてまいります。

急変に強い病院へ—— 初期対応の標準化を目指す

院内急変対応は、患者さんの生命を守る最重要領域です。当院では RRT (Rapid Response Team) が中心となり、教育体制を強化しています。私はその責任者として、急変事例の振り返り、問題点の共有、BLS/ALS 研修の実施などを通じて、「全員が急変に強い病院」を目指しています。

日本救急医学会認定 ICLS ディレクターとして、体系的な急変教育にも携わっています。2026 年 1 月には院内インストラクターとともに第 1 回 ICLS コースを開催予定で、今後は対象を同法人スタッフ、地域医療従事者、救命士へと広げ、地域全体の急変対応力向上に貢献していきます。



おわりに

地域の皆様に安心と信頼をお届けできるよう、これからも尽力してまいります。

医療 AI 胸部 X 線画像病変検出ソフトウェア CXR-AID を導入

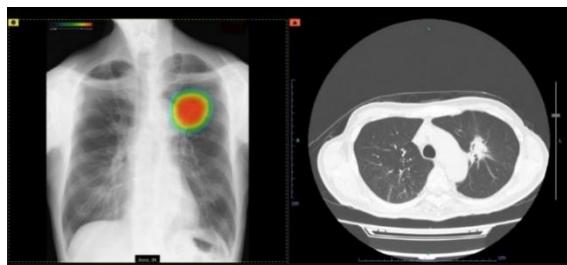
所沢中央病院 放射線科 佐藤忍

当院にて導入、運用を行っている胸部 X 線画像病変検出ソフトウェア『CXR-AID』のご紹介をさせていただきます。

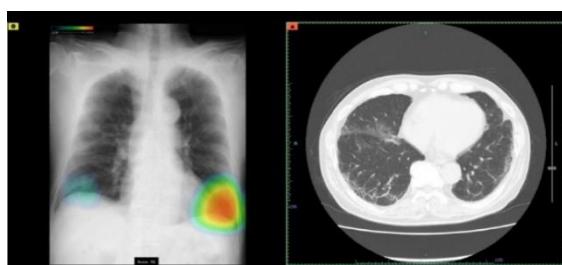
通常の診察時に胸部疾患（肺がん、肺炎、結核、気胸など）の病態を診断する際、胸部 X 線検査が行われます。これらの病気は進行が速いため、早期発見と早期治療が非常に重要なとなります。現在報告されているがん罹患後の死亡者数をみると、『肺がん』は男性で第 1 位、女性では第 2 位という結果となっています。総合すると死亡者数がもっとも多いがんという事が分かっています。

胸部 X 線画像病変検出ソフトウェア [CXR-AID] とは

- AI による自動解析：撮影した胸部単純 X 線画像を AI 技術活用して自動解析します。
- 病変検出・マーキング：主要な肺疾患の画像所見である以下の 3 所見が疑われる領域を検出してマーキングし、医師の診断を支援します。



「結節・腫瘍影」

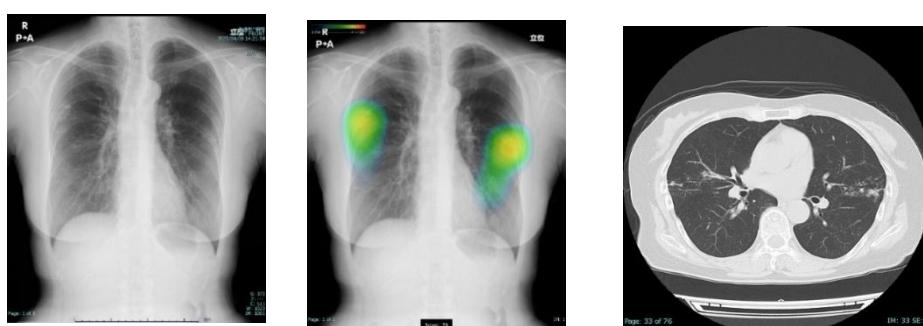


「浸潤影」



「気胸」

- 見落とし防止の支援：AI が検出した領域を医師が再確認することで見落とし防止に役立ちます。



- ヒートマップ・スコア表示：異常が疑われる領域を AI の確信度に応じて色分けしたヒートマップで表示したり、画像内の確信度の最大値をスコア（0～100）で表示したりするため、視覚的に分かりやすく診断の参考にできます。



高スコアの場合（要精査）

スコアの数値が高い場合は実際に治療が必要な病変である可能性が高いため、CT検査による精密な評価が推奨されます。

中間スコアの場合（再検査を推奨）

スコア数値が中程度の場合は治療が必要な病変か判断が難しいですが、CT検査等による確認やもしくはフォローアップによるスコアの上昇変化の確認が推奨されます。

低スコアの場合（特になし）

スコア数値が低い場合は、血管の重なりや過去の炎症による瘢痕など、問題のない所見の可能性が高いです。

- 迅速な解析：画像を短時間（数十秒程度）で自動解析するため、効率的な診断ワークフローを支援します。

他社との違いについて

1) 検出対象を絞った高い信頼性

CXR-AIDは主要な肺疾患の画像所見である『結節・腫瘍影（肺がんなどの可能性）』『浸潤影（肺炎、結核などの可能性）』『気胸（緊急性の高い疾患）』の3つの所見に検出対象を絞り込み、重要な所見に対する検出精度を高め医師が注視すべき領域が明確になり診断の迷いを軽減します。

2) 確信度を数値化、可視化する機能

AIが検出した病変の疑いに対し、医師の判断を強くサポートする定量的な情報を提供します。『異常がある・ない』だけでなく、『どの程度強く疑われるか』が分かり経過観察など、より詳細な臨床判断を支援します。

3) 既存システムとのシームレスな連携

撮影後、わずか数十秒で自動解析が完了し、放射線技師の手を煩わせることなく PACS 端末に結果が反映されます。

以上が当院で導入した「CXR-AID」のご紹介になります。胸部X線画像病変検出AIソフトウェアの必要性は、主に日本の医療現場が抱える『医師の負担増加』、『見落としのリスク』、『専門医の不足』という3つの課題を解決することにあります。まだまだ発展の余地はおいにありますが、AI技術を積極的に取り入れ、医療の質を落とすことなく増加する読影業務を効率化し、全ての患者様に質の高い診断機会を提供して行きたいと思います。



第46回所沢市民フェスティバル：地域の皆さんと歩む健康づくり

10月25日・26日の2日間、所沢航空記念公園で開催された「所沢市民フェスティバル」に出展しました。今年は雨が降ったり止んだりと不安定な天候でしたが、それを感じさせない多くの来場者が訪れ、ブース周辺は終日明るい雰囲気でした。傘を差しながら足を運んでくださる市民の皆さまの姿に、健康への意識の高さが伝わってきます。

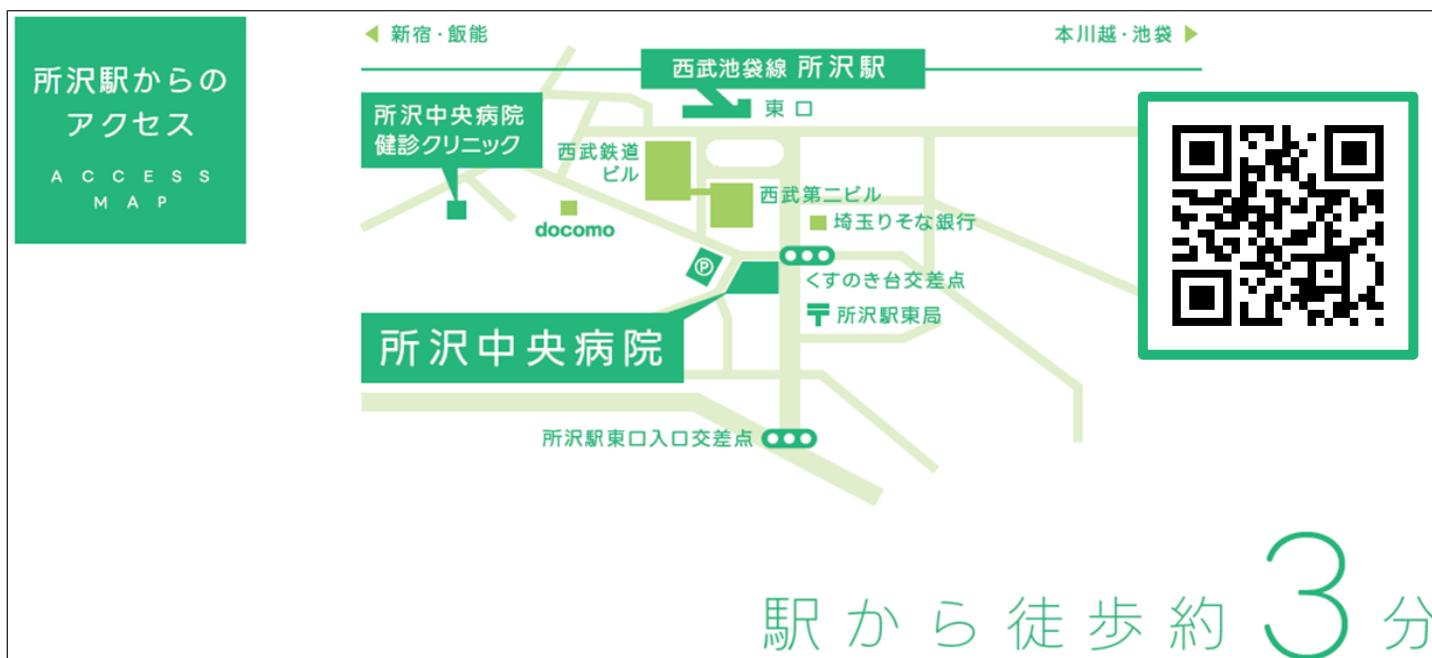
毎年、大好評の健康チェックを実施しました。血管年齢測定では、結果を見た皆さんから「生活習慣をどう変えたらいいの?」といったご質問が多く寄せられ、健康意識が高まるきっかけとなりました。さらに、体力測定も「運動習慣を見直す良い機会になった」と人気で、どちらのチェックも気軽に参加できると評判でした。また、今年は特にお子さま連れのご家族の来場が多く見られ、会場内に設けたキッズスペースで子どもたちが楽しそうに遊ぶ間に保護者の方がゆっくりと測定を受けられると大変好評でした。

「家族で立ち寄りやすい」「子どもが遊んでくれるので安心して測定できた」といった声も寄せられ、より多くの方に気軽に利用していただけるブースとなりました。雨天にもかかわらず、2日間を通して1000人以上の多くの方にご来場いただきました。「フェスティバルで病院スタッフに直接相談できるのはありがたい」といったお声もいただき、皆さまの反応を間近に感じられる貴重な機会となりました。



編集後記

秋を楽しむ間もなく、季節は一気に寒さを感じるようになりました。新型コロナウイルスの話題は少なくなってきたが、インフルエンザの流行は依然として続いており、職員やご家族の間でも感染が見られます。改めて、基本的な感染予防の徹底を呼びかけているところです。毎年この時期はイベントが多く、院内のチームが一丸となって取り組んでいます。フェスティバルや連携会を通じて、地域の皆さんに当院を知っていただくとともに、私たちがどのような形で地域に貢献できるかを考える、貴重な機会と捉えています。今後とも、どうぞよろしくお願ひいたします。



所沢中央病院だより vol.9

発行 2025.12

発行者 所沢中央病院

〒359-0037 所沢市くすのき台 3-18-1

Tel:04-2994-1265 Fax:04-2991-4655